

発表番号 17

「伊豆地域におけるニホンジカ被害防止対策の取組について」

伊豆森林管理署 森林技術指導官 山田 徹
森林整備官（森林育成） 鈴木 英樹
一般職員（ふれあい） 彦田 祥子

1 課題を取り上げた背景

伊豆地域では、全体で約2万2千頭、約27頭/km²のニホンジカ（以下「シカ」。）が生息していると推定されており、適正密度である1~2頭/km²を大幅に上回ることから、農林業の被害が頻発しており、また、天城山では、シカの食害等により、樹皮剥ぎ等による樹木の衰退、更新障害、植生の単純化等、自然植生の衰退が顕著となっています。

静岡県では、伊豆地域におけるシカ個体数の調整を実施しており、年間7千頭を目標に実施していますが、農林業被害の軽減にはつながっていない状況にあります。

こうした中、当署所管の国有林では狩猟者主体による捕獲を実施していますが、国有林、民有林等の連携による広域的な対策が求められています。一方、天城山におけるシカによる下層植生の食害が際立つことから、ブナ林等の後継樹の稚樹の育成や下層植生の回復を図ることも課題となっています。

2 具体的な取組

伊豆市・伊豆市有害鳥獣捕獲隊・伊豆森林管理署が、国有林をフィールドにシカによる森林被害の防止を検討するため、平成24年5月に伊豆地域森林鳥獣被害防止対策協議会を設立しました。

協議会では、伊豆地域におけるシカによる森林被害の防止を図り、野生鳥獣との共存に向けた取り組みを行うことを目的とし、国有林内にあるヒノキ林（採種園跡地）を活用し、①定点カメラによるシカの生息調査、②捕獲に適した間伐の伐採方法の検証及び下層植生の回復、③間伐施業地に捕獲柵を設置し、人工餌による誘因捕獲を行うこととしました。

また、平成23、24年度に、地元中学生等とともにシカの食圧を防ぎ、

下層植生の回復を図るために、ブナ保護林内等に防護柵を設置し、平成25年度は、防護柵内外における植生調査を行いました。

3 取組の結果

定点カメラによる生息調査は、シカの時間別行動を把握する上で重要なデータとなりました。間伐は、将来的に下層植生を回復させることも視野に入れ、強度の間伐を実施しました。その一部を柵で囲い、人工餌による誘因を行い、シカがある程度集まった頃を見計らい捕獲を試みました。今回の誘因捕獲は、捕獲頭数はわずかでしたが、シカの生息密度が高い場所に設置した場合、誘因捕獲の効果は高いものと考えられます。

また、防護柵内外における植生調査を実施した結果、明らかに光環境が確保できるエリアでは柵内に下層植生が繁茂していることがわかりました。



間伐実施箇所（捕獲柵設置）



人工餌によるシカの誘因

4 まとめ

設置した捕獲柵は、引き続き、捕獲が可能かどうか定点カメラによる継続した調査を行うとともに、柵を一定期間閉鎖し、下層植生の回復を図ることも考えていく必要があります。また、定期的に柵を見回り、シカの誘因が確実になった時、すぐに捕獲できる体制の整備も必要です。

一方、シカの食圧を防ぐための防護柵の設置は有効ですが、造林地におけるコスト削減や広葉樹の天然下種更新を図る上でもシカの生息頭数を減らさない限り、全ての場所に防護柵を設置することは困難であることから、伊豆地域全体で広域的な獣害対策の取組を進めていくことが求められています。